

蚕育てと女性

中国養蚕農家の事例から

倉石 あつ子

はじめに

二〇〇一年六月二十二日、中国浙江省桐郷市三新村の養蚕農家を訪問すべく旅立った。筆者は兼ねてから社会の様々な面における女性の役割について民俗学的手法をもつて考察を重ねてきたが、女性の仕事とされている養蚕に焦点を当てて日本と中国の女性の役割を比較してみたいと考えたからである。

養蚕は近代農家の経済生活において、手取り早く現金収入を得る生産手段として日本各地で盛んに行われた。現代に至って、大変な労力の割には得る現金が少ない（繭値が安い）ために、しだいに養蚕は衰退し現在では限られた養蚕農家が行うのみになってしまった。現在の養蚕は、稚蚕飼育の発達や飼料の変化、機械化などによって一昔前の

養蚕法とはかなり異なっている。にもかかわらず、蚕を飼うのは女性の仕事と見る部分は依然として残っている。特に女性役割を強調して象徴的に養蚕が行われているのは皇室である。毎年のように天皇が稲を植え皇后が蚕に桑をくれる姿がテレビで放映される。いったいこれは何を意味しているのだろうか。

かつては日中間で蚕種の交配や飼育方法の研究情報の交換が行われたというが、互いにどんな影響をうけあったのだろうか。文献によれば、中国においても飼育する者は女性に主体が置かれているという。実際には四齡から五齡の蚕はかなりの桑を食べ、その桑を準備するのは女性だけに任せられるものではなかった。しかも、日中ともに蚕の生育のよし悪しに家族こぞって一喜一憂するほど、繭のときは生活を左右するものであった。情報によれば、郷鎮企業によってかなり工業化が進んでいるものの、中国浙江

省呉江市から杭州市附近では現在でもまだかなりの養蚕農家があるという。そこで調査地を杭州市附近に定め、日中養蚕農家における特に女性役割を明らかにし、その異同と異同を作り出す構造を考えることにした。本稿は初年度調査を終えた段階での中間報告である。

一、浙江省における農家の現状

上海市郊外から杭州市に向かう高速道路沿いの両側には水田稲作を中心とする農村風景が展開するが、どの家もみんなきれいだである。ピンクや水色（青）の壁が多い。一戸建や十階建てのマンションが並び、上海から浙江省に入り、嘉興市を過ぎると水田に代わって桑畑が増える。水田が桑畑に替わるとともに、マンション風の家は少なくなり、一戸建ての家が増えてくる。また、田んぼの脇にわらぶき屋根の小屋が幾つか並ぶ情景も見かけられる。アヒル小屋である。田んぼに放して田の草などを採らせると同時に、行く末は食用にするのだという。そのほか、赤レンガを焼くための工場、野菜用のビニールハウスの群れなどが目に付く。

浙江省に入ってから目に付いた農家で新しく建てかえられた家は、上海でもそうだったように、たいていは三階建てから四階建てで、屋上には必ず「陽射」と呼ぶ明り取り

の役割を果たす装置がついている。この下はどうやら吹き抜けのようになっていて、家の中に日が射し込むように工夫されているらしい。杭州に近づくにつれて周囲に塀を巡らせたり、赤色の門を付けたりした家も目に付くようになる。門の屋根はいかにも中国らしいと感じさせるような反りのある勾配をもっている。

農家はお金があるから家を建て直したり改築したりする家が多く、その家にたいいてい親子で住む。息子が二人いれば一階を親が、二階を長男が、三階を次男が使うという風にして住み分けて同居する。一人っ子政策の時代にも農家では二人とか三人とか生む人が多かった。都市部のサラリーマンなどはたくさん生んで罰金を払えといわれ、「払えません」といってもサラリーマンだけで生活しているから、サラリーマンから罰金をひいてしまうので政策を守るしかなかった。しかし、農家は実際にはお金があるかもしれないのに、決まったサラリーマンがないから「お金がなくて払えません」といって押しとおすことができる。また、農家では後継ぎは男の子でなければいけないという意識が現在でも強く残っている家が多く、最初に女の子が生まれると次は男の子が生まれますように（あるいは生まれるかもしれないと期待して）と願って、二人目を生むという具合であったので一人っ子の家は都市部に比較して少ない。また、都市のサラリーマンは財産があるわけでもないのに、後継ぎは

男の子にこだわらなくなっていることも影響しているのだという。

お世話になったのは浙江省桐郷市梧桐鎮三新村（桐郷市の人口は三十万人から四十万人）のO家とT家である。T家の妻とO家の妻は姉妹で、近くの村のK姓の家から嫁にきた。桐郷市は菊茶の原料となる杭州菊の栽培でも有名な地域だが、農家の現金収入を支えていたのはなんといつても養蚕によるものが大部分を占めていた。O家・T家ともにそうした地域内にある平均的な農家である。

O家・T家ともに三新村の低位組織であるO班とT班に所属している。O班は三十四家族・T班は三十六家族を抱える単姓班である。どちらも水田耕作と養蚕を主体としている農家であるが、現在は二十代から三十代の若者はサラリーマンとして近くのマチへ勤めに出かけており、農業は四十歳代半ば過ぎから上の親世代が中心となつて行っている。ほとんどの家の水田には数十羽のアヒルが放たれており、このアヒルが田の草をついばむことによつて除草をしてくれている（日本でもこの農法を採り入れている地域がある）。そのほか羊・鶏などの家畜も飼つている。家の周囲には小さな畑があり、日常使用するチンゲンサイ・チョウバイ・小ねぎ・いんげん・きゅうり・なす・里芋・大豆・小豆・もろこしなどの野菜を作っている。ただしその種類は家によつて多少の相違がある。

O家の家族は夫と妻・娘二人で、長女は近くの烏鎮（町並み保存・景観保存指定地域）で中国人観光客のガイドをしている。下の娘は高校生である。下の娘には双子の姉妹がいたが、一人は町へ養子に出し現在は余り行き来をしていない（中国の養子制度についてはここでは触れない）。

O家も十年ほど前に家を建て直し、現在は三階建ての家に住んでいる。一階は台所・食事室・作業場及び道具置き場や家畜の飼育場で占められており、二階から上が居室になつている。しかし、夫婦の寝室・娘二人の部屋のある二階を普段使っているのみで、三階にある四部屋は空いている。本当はマチの人に貸すつもりだったが、マチの人の借り手がなかなか見つからないので、現在は空けてあるのだという。農産物からの収益金とともに、都市近郊農家では家賃収入による現金収入を考えていることが分かる。

T家もO家と同じ位の規模の家だが、T夫婦と息子夫婦その子供の五人家族である。息子夫婦は勤めに出ており、孫の面倒を見ながら老夫婦（といっても五十歳代）が農業及び養蚕をしている。

二、都市民の語る養蚕観

杭州市・桐郷市周辺の農家では現在でも養蚕を盛んに行っているにもかかわらず、一般の市民や大都市生活者の養

蚕に対する関心は薄い。蚕を見たことはあるが触るのは嫌だとか、見たことがないという人もいる。シルクはいいが蚕は嫌という人もいて、そうした情況は現在の日本とよく似ている。上海などの大都市には、蚕に青梗菜（ジンギンサイ）・栗・柏の葉をくれて育てるので、繭は緑色のものであると思ひこんでいる若者も多いという。これは天蚕のことを指しており、実際に養蚕を行っている農村部と、それらをまったく知らない都市部の特に若い世代では認識にかなり差があることを示している。

以下は都市に育つたR（杭州市 男性・三十代半ば）とS（上海市 女性・三十代半ば）とが語る農家観と養蚕観である。

杭州市や桐郷市の農家では、水田のほかにさとうきびや野菜・菊（茶の原料）を作っている。稲には晩稲と早稲があり、晩稲は粘りがあり美味しいのだという。もち米も晩稲にあたる。早稲は量はたくさんとれるが粘り気がなくまずい。水田は一年に一回しか金にならないので、効率が悪。杭州近辺は、一度収穫をした田にまた別の作物を作る。二毛作を行っており、これを双抱（soso）と呼んでいる。田植えは、小学生も手伝う。田植えの時期は六月下旬から七月初旬までで、現在でも手植えをする家が多い。

養蚕は中国では非常に大切に考えられており、いろいろな文学作品にも出てくる。例えば、桐郷市烏鎮出身の作

家、沈雁水（shin en pin 茅盾）は『春蚕』の中で一九三〇年代の養蚕農家の様子を詳細に描いている。また、清代の有名な詩人李清照（lishinsō）は

春蚕到死糸方尽

踏矩成灰泪始干

と、蚕の生涯を賛美した詩を残している。自分をいとわず病気になっても死ぬまで働きつづけ人のために尽くすことの例えとしてよく引用される詩で、何も自分の欲求はなく死ぬまでひたすら働く蚕のような人になりなさいと、学校では小学生や中学生にこの詩を折にふれて教えている。

また、夏休み中などには愛心（人を愛し、命を大切にすることを）を養成するために蚕を飼わせて粘り強く、成長の過程を観察させ、糞を取るなど実際の世話をさせて、終わるまで（繭になるまで）育てて、達成感をもたせる。繭から蛾になって卵を生み、死ぬのを見るとせつかく飼っていた蚕が最後には死んでしまうので、子どもたちは悲しい気持ちにもなる。一人十匹くらいを割り当てられ、箱に入れて蓋に穴をあけて飼う。朝起きるとまず蚕の様子を見、学校のある間は父母に桑をくれてくれるように頼んで出かける。桑は学校附近にもあるし、市場でも桑の葉を売っている。少したくさん買ってきて冷蔵庫に入れておき、くれる前に早めに出して布でふいて乾燥させてからくれる。Rも

子どもの頃こうして蚕を飼ったのだという。繭は記念に持っておいたり、糸を引っ張り出してみたりする。

蚕は勤勉、粘り、動物を愛する心を養うといったことに非常に適している。杭州市・桐郷市をはじめ、浙江省内では多くの学校で子どもに蚕を飼わせているようだ。解放前はこの辺では遺体を全てシルクの寿衣に包んで土葬にしたので、現在でもシルクに包まれた骨だけが土の中に残っている。日常的に絹の衣服を使用することはほとんどないが（ベッドカバーは自家用の真綿で作っているが）、人生の最後のときくらいは贅沢をさせたものと考えられている。

以上のように、都市民であっても三十代半ば以上の人々には養蚕のほぼ正しい認識はあるように思われる。しかし、養蚕を一年に何回行うのかなど、細部にわたる認識は薄く、R・S両氏とも一年に一度だけしか飼うことができないと考えていた。したがって、養蚕に関わる仕事の細部にわたる知識はほとんど持ち合わせてはいない。Sさんは祖父の家が桐郷市の近くの村にあり、やはり蚕を飼っていたというが、「匂いがあつた」「糞がきたない」「蚕に触ったら冷たくて気持ち悪かつた」などの感想を持っている。彼女は実際の生活の中で絹は皮膚のためにもよく、下着や寝巻きなどに使用しているが、布地になるまでの工程にはほとんど無関心である。

こうした状況は日本とまったく同じであり、生産者と絹

を消費するものとの間には養蚕という仕事の大変さに思いを寄せるような装置はない。むしろ、蛾が産んだ卵から孵った蚕が吐き出した糸から作られたもの、という実際の過程は美しい絹地からはイメージできないようになっていくといつても過言ではない。

三、O家とT家の養蚕

蚕は一年間に五回飼う。春・夏・秋・晩秋・冬の五回である。昔から桐郷市の梧桐・石門・烏鎮は良質の蚕種が生産される地域であつた。その背景に良質の桑を有する広大な桑園地帯を控えていたからである。一九九〇年には梧桐鎮に大型の催青楼（卵を孵化する場所、日本の稚蚕飼育所にあたる）が造られ、一回に三十万張りの蚕種を催青させることができるようになった。ここである程度の大きさに育てた蚕を各養蚕農家に配布する。

しかし、O家は現在でも催青から自家で行っており、一回目の春蚕は五月一日に掃き立てられた。実は養蚕において一番大切なのはこの催青のとくと、上簇させるタイミンクを見ることである。特に催青の折には女性達のみが関わり、我が子を生み出すのと同じような手のかけ方をした。養蚕という作業の中における女性性が最も求められるときであり、最も象徴的に現れるときでもあつた。この点につ

いては後に述べる。ここではおおよそその催青の手順を見ておきたい。

孵化したばかりの蚕を虫といい、小區（福島市などで言うワラダ。以下ワラダと記述する）に移したりするときには、アヒルの羽を使ったり、竹の箸の先を細く削った箸ではさんだりするが、蚕を傷つけないように注意する。また、孵化したばかりの蚕は病気にもなりやすいので、様々な道具（箸・羽根・桑切り包丁・桑入れ・ワラダ・給桑台などなど）と催青に使う部屋を、春蚕が出る前に消毒する。

蚕の卵を孵化させる時には、ワラダの上に白い紙（デパートなどでハンドバックを包むようなやわらかな紙）を敷き、その上に更に赤い紙を敷いてその上に種を羽根でそつと散らす。このとき、卵が重ならないように注意して羽根で広げる。その上に綿の紙をかけておく。孵化に必要な温度は華氏八十二度なので、寒いときには蜂高煤（練炭）を使って室内を暖める。練炭から煙が出るので蚕が死んでしまうので、練炭を入れるコンロ（ストーブ）に煙突をつけて煙を室外に出すようにしている。季節によつて、あるいは陽気によつては、練炭を使わずにお湯を使って暖める。小さな籠の上に紙を敷いてその上に卵を掃き立て、給桑台の上に載せる。その台の下に籠と同じくらの大きな盥の中に入れて置き、二、三時間おきにお湯をとり

かえる。こうしていると二日（四十八時間）ほどで卵が孵化する。卵を孵化させる部屋を蚕房という。T家の蚕房は四畳くらいの広さである。

T・O姉妹のおばあさんたちのころは、蚕を孵化させるのに女性たちが自分の膚の熱で孵化させたという話を聞いたことがあるという。

こうして孵化させた春蚕は四回の脱皮を繰り返した後、一ヶ月ちよつとで上簇する。春蚕が出ているときは、田畑の様々な仕事と重なつて非常に忙しいが、多くの家では春蚕を一番たくさん飼っている。最後の冬蚕は十一月いっぱいかかる。桑の葉もなくなつてくるので、上の芽だけを摘んできてくれる。また、寒くなつて温度が低くなるので、部屋の中を蒸気で温める。夏蚕のときには暑い、暑すぎても蚕が駄目になつてしまう。そういう意味では暑すぎる夏蚕が一番よくない。したがつて、飼う量も少なくするということになる。

現在は一日に三回から五回桑をくれる。桑をとりに行くのは夫で、籠と天秤棒をもつて畑に行き、桑を摘んでくる。桑は上から三番目、五番目くらいのところを、指先でつまんでひねるようにして摘み取ってくる。摘み取つてきた桑は家の中の竹を編んだ囲いの中に入れ、乾燥しないように布をかけておく。

時間が来ると給桑をするが、大きな桑の葉をひとならべ

するだけである。(日本では桑をたくさんくれないと、ヒキルまでに時間ばかりかかり、いい繭が出来ないという。一枚の籠に蚕を多く入れるのを厚飼いいい、桑をくれる時間を省くために少し厚く飼う事もある。しかし指導員などは「もう少し薄くするように」と指導していく)。給桑の量が少ないためか、種類のためか日本の蚕に比較して蚕が小さい。蚕の種類については今後確認していく。蚕糞を取り替えるときには蚕の上に網を置き、その上に桑をくれる。そうすると蚕は桑を食べるために網の上に登ってくるので、網を持ち上げて別のワラダに移し、今までのところにある蚕の糞や茎(葉脈)だけになった桑などを捨てる。こうすると、ワラダは綺麗になる。蚕網は昔は麻製のものを使ってしたが、現在はビニール製のものを使用している。

春蚕の場合、掃きたてからほぼ一ヶ月で上簇する。昔は日本でも使っているような藁製のマブシを使っていたが、現在は竹の棒にボール紙の細かい枠が幾つもついた格子条の方格子を使っている。ヒキた蚕を別にして方格子を吊るしておく、蚕がそれぞれ枠の中に入って繭を作る。

蘇州の博物館では方格子を使わずに直接真綿を作る実験をしていた。ヒキた蚕をうちわの上に載せておくと、蚕はそれぞれに一定方向に回って糸を吐き続け、糸を出し終わると蛹になってしまう。その蛹を払い落とせば、真綿状の物が出来あがっている。実験の目的としては、真綿にする

過程を一つ省こうというものである。

蚕を飼い終えると使った道具を綺麗に洗い、消毒をしてよく乾かし、もう一度消毒をして翌年までしまっておく。

O・T両氏ともに、掃き立ての前に隣接市の含山に祭られている蚕花神に参詣する。蚕花神は含山頂上にある含山寺の中に祭られているが、この神の祭日は清明の前後(四月五日頃)で、このころになるとT・O姉妹は家族とともに含山の蚕花神へお参りに行く。蚕があたつていい繭が取れるようにお参りするのだといい、線香とローソクをもつていつて供える。路線バスを利用して、往復三時間くらいかかる。蚕花神が祭られている寺のある山自体を含山寺といっており、参道には土産物屋や娯楽施設などもあり清明前後にはたくさんさんの参詣人で賑わうという。境内には大きな蚕と繭を型どった展示室も設置されており、養蚕の行程が分かるようになっていいる。祭りのころには開館している。蚕花神の姿を配したバッチなどを売っているがお札などはなく、ともかくお参りして蚕の豊作を祈って帰るのだという。事実、T家には財神が到来するようになるといってお札は貼ってあったが、蚕花神のお札は見当たらなかった。繭は現在五十キログラム一〇〇〇元くらいで売れる。一〇〇〇元という値段に農家は繭が高く売れるようになったと喜んでいる。

四、催青における女性の役割

現在の催青の様子は前述した通りである。蚕の種は枠に産みつけた種が茶封筒に入っていて、蚕種問屋から一袋三十三元で買ってくる。重さではなく何袋といつて封筒の数で買ってくる。

種をワラダの上の紙の上に羽根で払い落とすようにし、暖かくしておく、寒い時期で二十四時間、暑い時期なら十数時間で孵化する。この時の温度調節には非常にこまやかな気を使わなければならない。なぜなら、このときに暑くし過ぎたり寒すぎたりすると、二眠とか三眠まで育った蚕が病気になったりして全滅することもあるからである。

特に春蚕と冬蚕の温度管理は大変で、ワラダを二重にして間に布団を敷き、更に上に毛布をかけたたりしている。しかしただ暖かくすればいいというものではなく、温度が暑過ぎると蚕は黒くなって死んでしまう。したがって、子どもを育てるときと同じように目を離さずに飼育をしないとけない。

孵化した蚕には桑の葉を細かく切ってくれる。蚕が小さなうちは病気にかかりやすいので、「防病一号」という粉の消毒薬を紙と蚕に振りかけて病気を予防する。蚕が三センチくらいになったら、桑の葉は切らずに葉のまま与える

が、この位の大きさになればまずは安心といつてもよい。現在、蚕の品種の改良によつて病気になる心配はほとんどなくなったが、それでも女性達は蚕の具合を見ることを怠らない。桑を採ってくるのは男の仕事だが、蚕に桑をくれ育てるのは女の仕事されている。現在は男が勤めに出るので、女が桑を採りに行く家もある。

それでも昔よりは桑をくれる回数も減ったし蚕も丈夫になつたのでずいぶん楽になつたと言う。また、O家もT家も自家で催青を行っているが、これを催青場に頼めばもつと手をかけなくてもすむようになると言う。

現在はこうして催青もずいぶん楽になつたが、かつては女性たちが自分の懐や背中に蚕種を抱えて再生させたものという。既にT・O氏の祖母の時代のこととして伝承されていることは前述したが、いくつかの文献からその方法を見ておきたい。

『桐郷県史』によれば、明代には「干谷雨前后取蚕連包而护之、以衣裳覆之、置腹背以暖之、候蚊全生。」⁽²⁾というような催青の仕方が行われていた。つまり、穀雨(四月二十日頃)が近づくと女性が蚕種を抱いて自分の体温で暖めて催青させるのである。こうした方法は明代以降、一九三〇年代まで続いていたと思われる。茅盾の『春蚕』にはその様子が詳細に書かれている。少々長いがその部分を引用してみよう。

「人々は大きな希望と、同時に大きな恐れを抱いて、春蚕との「大戦争」の準備をした。穀雨節が近づいた。村の二・三十軒の家の蚕種が段々緑色になってきた。女たちは脱穀場で出会つたりすると、慌しく、気をもみながらも楽しんで話し合った。「六宝の家じゃ、もうすぐ『窩種』するらしいよ」「荷花はもう明日抱くつて言つてたよ。こんなに早くねえ」「黄 道士様に占つてもらつたら、今年は桑の葉は値が四元まで上がるとき」四大娘は我が家の蚕種を見た。まずいわ。びつしりと植わつた黒胡麻のような点々はまだ真つ黒で、ちつとも緑にならない。夫の阿四が明るいとところに持ち出して仔細に調べたが、やはり緑の影すら見えない。「お前、いいから抱ちまいな。この余杭品種といのは育ちが遅いかもしれない」阿四は女房の様子を見て、自分の不安を押し隠して慰めた。四大娘は口を尖らせて答えなかつた。通宝じいさんはひからびた顔をしかめてひとこともしゃべらなかつたが、心の中ではやはりうまくないと思つた。幸いなことに、翌日になつて四大娘が注意深く蚕種を調べると、やつた！ところどころ緑色に変わつてゐる。それもつやつやと鮮やかな色だ。四大娘はすぐ夫に、通宝じいさんい、阿多に、そして息子の小宝にも伝えた。そして即座に三枚の蚕種を胸元に抱いて、赤ん坊に乳をやるようにじつと座つた。夜も蚕種を抱いたまま布団に入り、阿四は阿多の寝床に追いやられた。布にびつし

りと生えた蚕の卵は膚に触れるととてもくすぐつたかた。――以下略――³⁾

こうして女性に抱かれた蚕種は三日から四日で孵化し、掃き立てられる。掃き立てを収蚕といい、収蚕をするときにもおごそかな儀礼があつたと伝えられている(儀礼については未調査なので、今後の課題としたい)。まさに催青は女性が生み出すときのように、とりわけ重要な期間として捉えられていたことが分かる。また、女性の方もこの時期を最重要期間として意識し、抱きはじめる期間を何時とするか女性同士で情報を交換し合い注意深く蚕種を観察して決めていた。ただし、収蚕の日は穀雨の日を避けなければならぬという言い伝えがあり、穀雨の前日まで収蚕するのがいいとされている。また、収蚕の三日前に蚕室に泥を塗つたにんにくを置いて、収蚕の日になんにくにどのくらい芽を出しているかによつて、繭の出来不出来を占う習俗があつた。いい繭ができるか否かは一家の浮沈に関わり、稲の売上金では足りない現金収入を繭の売上金で補わねばならなかつたが、その出来不出来を決める重要な孵化の瞬間は女性たちの蚕種に対する観察力と経験によつていたといえる。

こうした方法は、日本では調査報告上は既に聞くことができる。しかし、『蚕飼養法記』(陸奥)には、「――前略――桑葉、むしに先達てしげりたらハ、たね紙をあたたむへ

し。然れども、火などにあて、あぶることあるべからず。若、沢山にたねあらハ、戸棚などの内へ火鉢に火を埋ミ、ほつこりとして、どこともなく戸棚の内あたたか成やうにして、たね紙ハ、風呂敷などに、ひとへ、ふたへほども包入置、たびたび戸棚の内のかげんを見るへし。ほめくほどにハわろし。又、すこしはかりのたね紙ならハ、背にいれてあたたむへし。人身にてあたためるハ殊外よし。然れとも腹のかたへ入置待れば、毎日の物ごとにさハリと成て、紙へつよく其身あたりてしハよせ、わろきゆへに、せなかへ入るを吉とす。」という記述があり、催青には人肌の温度が適しており、少しの蚕種なら人肌で孵化させるのをよしとしていたことが伺える。ただし、ここでは「女性」の仕事とされていたのかは不明である。しかし『蚕飼養法記』の最初の記述に、千早振神代の昔、天照大神が機織り物を始められて以来の女性の仕事だと述べている。そして、一つの糸口から一本の糸が長く長く出てくるのと同じように、これは古くから女性の手仕事として今に伝えられ又これからも伝えていかなければならないものなのだと規定しているのである。そうした記述からすれば、蚕種を背に入れて孵化させるのも当然女性ということになる。

こうした記述の奥には欽明天皇の時代に、くれはとり・あやはとりという二人の織姫が異国から渡つて来て天皇の姫であるかぐや姫に女の手仕事である養蚕や織物の技術を

授けたという伝承が流れていることが伺える。日本各地に伝わる養蚕の起源説話ともいえる伝承については稿を改めて。

ともかく、養蚕に関わる女性の役割については早くから注目されてきたが、女性の象徴性について「こぼ育て」と「子育て」という言葉のうえで共通性に求められることが多かった。しかし、特に催青という過程を通してみると、実態としても女性と蚕との関わり方そのものの中において女性役割の重要性を求めることができる。今後とも日中の資料収集に努め、比較研究を深めたいと思つてゐる。

本稿の調査は跡見学園女子大学特別研究助成費（美学美術史学科 池上貞子教授との共同研究「女性とモノ」）によつて行つた調査によつて得た資料の中間報告である。関係者各位に記してお礼を申し上げる。

註

(一) 田植えは観察によれば以下のように行つてゐる。

多くの家は手植えである。苗代は日本より少し巾が広いかと思われる短冊式の苗床で稲苗が育てられている。雨の日はこうもり傘などを棒につけて雨をしのぎながら、苗を手でとる。苗とりは多くは女性の仕事のようにである。

採つた苗はたんぼの中のあちこちの植え易いところには

撒かれている。およそ一反歩くらいの広さの田んぼに、一人から三人くらいの人数で手植えをしている。筋をつけているのかどうかは分からないが、一人が三本くらいの畝を担当して後ずさりで植えている。片手で苗束から数本の苗を分け、もう一方の手でその苗を瞬時に植えるリズムは日本と変わらない。植え手は男性もいるが、女性が多い。

なお、炊事などはプロパンガスも使用するが、ご飯などは竈を利用する。

焚き物は家の周囲にある草や桑の葉・桑棒など何でも使えるものは使っている様子。焚き付けは藁を使用。一掴みくらいをくるくると振り、更にそれを輪注連のように丸めて、株と穂先を手前にもってきて株・穂・株・穂という順に交互に折って、それを火箸にはさんで火をつけ、竈の奥深くに入れる。藁を二回から三回、くべて燃え盛っているとところに桑棒をひざに当てて適当な長さで折っていく。桑棒などは家の前などに立てかけておく。桑の株も掘り出して焚き物としているが、炊飯・蒸し物には使わなかったので火力を要するときには株を使うものと思われる。桑棒・藁などは自家でまかなう。

(2) 桐郷県《桐郷県志》編纂委員会編『桐郷県志』一九九六年十一月、四二八―四六二頁、「第十編 蚕桑刺繡」。

(3) 茅盾『藻を刈る男』宮尾正樹・白水紀子・伊藤徳也訳、JICC出版局、一九九一年。

(4) 佐藤常雄他編『蚕飼養法記』『日本農書全集』四七、農山村文化協会、一九九七年。

(5) 註(4)に同じ。

参考文献

費孝通『中国農村の細密画』小島晋治訳 研文出版 一九八五年

費孝通『江南農村の工業化』大里浩秋、並木頼寿訳 研文出版 一九八八年

福島県立博物館編『天の絹糸―ヒトと虫の民俗誌―』一九九八年

長野県立博物館編『蚕糸業にみる近代の長野盆地』一九九〇年

(くらしいし あつこ・民俗学)